

# 大学英語リメディアル教育再考

奥羽 充規\*・福元 広二\*\*

## Remedial English Education Revisited

OKUBA Atsunori\*, FUKUMOTO Hiroji\*\*

キーワード：リメディアル教育，リメディアル英語教育，自立学習者，自尊感情

Key Words：Remedial Education, Remedial English Education, Autonomous Learner, Self-Esteem

### 0. はじめに

日本において少子化・大学改革という言葉を目にしたからすでに10年以上になる。また、同時に大学に冬の時代が到来すると言われ始めてからも久しい。少子化の波が18歳人口の減少を引き起こし、その結果大学の基盤を揺るがす事態を引き起こしてきている。それは何か。大学のユニバーサル化である。2010年度には大学進学率が50.9%になり、日本全国の大学が受験生確保のために様々な方法を打ち出しているが、中でも注目すべきはその多様な入試の創出である。推薦入試やAO入試といった一つの学科を何通りかのやり方で受験することができる受験の重複システム、そして私立大学のセンター試験参加など数多くの方法で学生確保に躍起になっている。その結果何が起きたのかは周知の通りである。すなわち大学生の学力低下である。それはもちろん、大学全入化時代という時代が引き起こす必然的な現象であるとも言える。天野(2003:142)はマーチン・トロウ(1976)が挙げている「ユニバーサル高等教育」像の検討の中で、「(進学率が50%をこえると)進学は一種の義務とみなされるようになり・・・ますます多くの学生が、進学しなければならないという義務感にかりたてられるようになっていく」と述べているが、その結果、極めて憂慮すべき低学力の大学生が数多く生まれることとなったのである。大学が異なればその学生の学力も当然異なるのであるが、学力の低下はもはや全国規模の現象なのである。

2005年、日本リメディアル学会が設立されたのはまさにそのような大学生を対象とした教育の方法論に関する研究の必要性が顕著になったという経緯による。1990年代半ばから盛んになってきたリメディアル教育とはまさに時代の要請によってその研究の幕開けがなされたのである。したがって、目下各大学において、その大学に求められる学力レベルに達していない学生のためのリメディアル教育クラスが開講されているが、実際目の前にいる学生に応じた学力の補完的授業を一部の教員側のマンパワーでなんとか乗り切っているという大学も少なくない。そして、そういった傾向は英語教育の分野でももちろん例外ではない。2005年度より年々、英語リメディアル教育に関する研究報告も増え始めており、多くの英語教育関係者がいかに英語リメディアル教育に関心があるのか

---

\*鳥根大学外国語教育センター

\*\*鳥取大学地域学部地域文化学科

がわかる。しかしながら、その研究成果に関してはいまだ明確な成果はでていない。実際、その教育の目的もそして到達目標すらも明確にされていないなど問題点が数多くあるのである。

本論文では、そのような大学英語リメディアル教育に関する現状とその意義について、今一度再考することを前提として、英語リメディアルとは何か、そしてその問題点とは何なのかについて言及するとともに、英語リメディアル教育の意義について中学・大学連携授業、一般教育英語クラス、そして大学英語リメディアル教育クラスなどにおける意識調査からみられる学生の意識をもとに論じることをその目的としている。

## 1. 英語リメディアル教育とは何か

英語リメディアル教育といっても、その言葉が意味している内容は必ずしも一様ではない。というのは、リメディアル(remedial)という言葉は『ジーニアス英和大辞典』よると、「(学力の遅れた生徒・学生のために行う) 復習の、再教育の」という意味の形容詞として用いられる言葉であるが、英語リメディアル教育クラスを英語の復習クラス、再教育クラスといった意味を当てはめるだけでは必ずしも、英語リメディアル教育という言葉の意味をあらわすには不十分だからである。とかく、英語リメディアルクラスはその言葉を使用する母集団たる大学や各学校において英語が苦手とされる学生に対する補完的クラスとして使用される言葉であるが、その補完の在り方とて一様ではない。習熟度別として正規のクラスの中で行われる基礎レベルのクラスにおける授業と、正規のクラスのような単位修得のない希望者のみの英語復習クラスの両方を、英語リメディアル教育クラスとして同列に置くことはそもそも不自然極まりないことであろう。では、英語リメディアル教育という言葉で意味するのはどのような教育なのだろうか。まずは、その点を明確にしたい。

### 1. 1 リメディアル教育とは

鈴木(2011:37)では、リメディアル教育について『コウビルド英英辞典』の定義を挙げて次のように説明している。

『コウビルド英英辞典』では、

“ Remedial education is intended to improve a person's ability to read, write, or do mathematics, especially when they find these things difficult.” と定義されている。今大学で行われているリメディアル教育とはまさにこの定義のような意味合いで行われているのだと思う。

この定義で言及されているのは、いわゆる「読み、書き、数学」といった大学レベルの教育を受ける上での基本となる能力の改善を目的とした教育を指しているのである。リメディアル教育はアメリカのコミュニティカレッジなどでは、Developmental Educationと呼ばれ、専門科目の授業を取りながら、または専門教育を履修するための条件として、母語であり英語の基礎文法と語彙、レポートの書き方、簡単な数学などが教えられている。したがって、そもそもリメディアル教育という言葉が持つニュアンスというのはまさにそのようなレベルにおける教育であろう。合田(2011:16)では、「リメディアル教育は、学生や生徒に必要とされる基礎的な学力を身につけさせるために、補修的、治療的に行う教育を指す。」としているが、日本とアメリカの違いとしては、アメリカが大学レベルの教育の準備としてリメディアル教育をコースとして施しているのに対し、日本では大学レベルの教育の準備だけでなく、大学レベル以下のきわめて基礎的な学力の教育をする必要があるのである。すなわち、日本におけるリメディアル教育における教育とはアメリカのリメディアル教育で

補完する教育に比べてその幅がより広いものなのである。ところで、このリメディアル教育であるが、日本では、1990年代半ばくらいから盛んになってきた。合田(2011)が言及しているように、大学においても、入学前教育、高大連携教育、入学後に初年次教育、授業の予習復習を補助する補習教育などが採用されているのである。

ベネッセ教育総研の山本(1999)によれば、日本の大学のリメディアル教育パターンには以下の4つがあるとしている。

#### 日本型リメディアル教育パターン

##### A. 高等学校までの教科教育復習型

未履修・学力不足と判断された高等学校教育課程での教科・科目について大学が補完授業を行っている型

##### B. 大学での学習活動の入門型

専門教育での活動に必要な手法を教授する型

##### C. 入学前教育

入学手続きをした合格者を対象に入学前に大学が実施する教育

##### D. 大学での講義の補習・復習型

大学の前期試験等の結果から、基準点不足の学生に対して行われる教育

目下、問題となっているのはもちろんA型のパターンであり、入学試験の多様化によりここで補完すべき学力範囲の幅はまさに天井しらずである。

次に、大学におけるリメディアル教育の実施科目としては、穂屋下他(2012)の調査によると、数学(61%)、化学(45%)、物理(42%)、生物(36%)、英語(35%)、日本語(37%)の割合で全国の大学で各科目のリメディアル教育がなされている。化学や物理、そして生物などの理数系科目に加え英語、そして日本語がその科目には挙げられている。しかしながら、そのリメディアル教育のレベルに関しての言及はあくまで漠然としたものである。いわゆるプレイスメント試験等を実施する大学もあるが、どの学力レベルまでの学生がリメディアル教育を必要とするレベルなのかという議論はされておらず、また各大学ないしは学校によってリメディアル教育が必要とされる学生の学力レベルにも差があるのである。山岡(2012:165)でも「入学者の学力低下に伴い専門教育の推進が困難である現状において、高校卒業までに修得すべき学習内容の補習の授業」と大学におけるリメディアル教育を定義しており、「高校卒業までに習得すべき学習内容」とはどこまで指すのかという点からも、その言及内容に明確さは見られないのがその実態と言える。

## 1. 2 英語リメディアル教育とは

リメディアル教育という言葉がそうであるように、英語リメディアル教育もまた、学生の英語の学力が現時点において学生が所属している学校等についていけるレベルに達していないがゆえに、その補完を目的として行われる教育のことを指す。大学英語リメディアル教育に関しては、既出の山岡(2012)における定義の中にあるように、「入学者の学力低下に伴い専門教育の推進が困難である現状において、高校卒業までに修得すべき学習内容の補習の授業」と定義することはできるが、高校卒業までに習得すべき学習内容とはどのレベルまでの内容を指すのかについては明確に示されていない。英語という科目は学習が積み上げられていく科目であるので、中学1年生から始めたとし

ても大学までに少なくとも6年間の積み上げが存在している。高校卒業までの6年間のどのレベルに達している必要があるのかという問題も存在するとともに、学生にリメディアル教育という形で補完する基礎レベルの学力に関しても時として底が知れないという可能性もあるのである。

合田(2011:16)は大学における英語リメディアル教育の内容について次のように言及している。

これらは、基礎的な学力、例えば中学英語の文法がどこまで身に付いているかとか、いないとかいう学習内容に重点が置かれていることが多いようである。 合田(2011:16)

大学生対象の英語リメディアル教育でありながら、中学文法がどこまで身につけているかという視点ははなはだ検討外のように思われるかもしれないが、多くの大学においてその視点は必ずしも外れてはいない。酒井(2011:11)は「大学でリメディアル教育をうまく施しても、卒業後に仕事に使えるわけでもないような英検3級レベルの英語力がせいぜいである」と言及しているが、まさにこの言葉に表されているような現状が大学生の英語レベルに実際に存在しているのである。

英検3級レベルまでの力がついたと喜ぶべきか、そのレベルまでの力しかつけられないと絶望すべきなのかという議論はおいておくと、そもそもそれだけの学力の学生が大学生になれてしまうという憂慮すべき現実をわれわれ教員は日々目の当たりにしているのである。しかしながら、大学において中学レベルの学力の補完をするという事実は、見方を変えると中学時における英語教育のあり方にも疑問を呈する要素であり、今後単に大学における英語リメディアルの方法論を考えるだけでなく、そこにいたる過程についても議論しなくてはならないことを如実に教えてくれるのである。

### 1. 3 英語リメディアル教育クラスと英語再履修クラス

日本全国の多くの大学において実施されている英語リメディアル教育クラスであるが、そのあり方も必ずしも同様でない。例えば、田村他(2010)にあるように、神奈川大学では、基礎教育支援センターがイニシアティブをとる形で大学の入門講座、基礎力確認講座として「土曜講座」などの独自のプログラムを個別指導とは別に実施している。また、島根大学では「大学英語入門」というクラスを大学入学時に英語1Aという正規のクラスの内容とできるだけタイアップさせながら、英語が苦手な学生も大学の英語の授業についていけるように学生の自主に任せて開講している。英語が苦手な学生は自らの英語力をよく分かっているので、毎年100名近い学生が履修登録をしているのである。更には、大学によっては正規のクラスの単位要件として英語リメディアル教育クラスを履修していることを前提としているところも存在し、今後ますますそのあり方も多様になっていくと思われる。

また、学生の学力の低下に伴い、このような英語リメディアル教育クラスを開講するだけでなく、清田(2011)でも言及しているように習熟度別で必要な学生には基礎的な内容の授業を行うといった対策を大学側も採り始めている。したがって、そもそもの英語リメディアル教育のあり方、そして大学英語教育といった質の点から考えるとときわめて不自然ではあるが、授業の内容によっては正規の授業内容自体が英語リメディアル教育となっているケースも数多く存在している。

では、大学英語教育における必修英語の再履修クラスはリメディアル教育クラスになるのか。いわゆる英語再履修クラスというのもまた、津田(2007)の研究などにあるように英語リメディアル教育クラスとして扱われるケースも多々ある。津田による英語再履修クラスの定義は次のようなもの



である。

大学や個々の英語教員からの、学生への積極的な働きかけにもかかわらず、依然として、大学や各教員が設定したレベルの一定の成績を修めることができず、単位を取得できない学生の層が存在する。この単位未修の学生に対する大学の救済策として、各大学では「再履修用特別クラス編成」「通常クラス編入」「代替科目設定」などの対策を講じている。

津田(2007:1)

この定義にあるように、このクラスで補完するのは基本的には学生の単位取得のための機会であり、そのクラスの開講目的は必ずしも学生の基礎的な英語力を補完することではない。また、津田自身言及しているように英語のクラスでありながら、英語の堪能な帰国子女の学生らに日本語を中心とした英語授業が行われた結果、再履修クラスを受講するなど、単純に英語力の欠如が原因で履修をしているわけでもないケースもあり、再履修クラス＝リメディアルクラスとは実際のところ言い難い。津田(2007)において、学生の再履修クラスに対する態度（再履修原因に対する自己認識、英語再履修クラスに対する意見・感想）に関する調査が行われているが、この調査では「再履修クラスの受講原因の自己認識」に関する質問についての選択式の調査と「再履修クラスのあり方に対する感想、意見、要望などがあれば、自由に書いてください」といった自由記述の調査を行った。中でも選択式の調査であるが、そこで再履修クラス履修の理由として一番多かったのが「出席不足」、2番目に「定期試験の点数不足」であった。次にくるのが「平常点不足」であり、この調査結果は予想通りである。また、「受講原因がわからない」といった選択肢を選んだものは2名ほどであった。少なくとも、出席不足が原因で再履修クラスを受講する学生が一番多く存在し、その中には必ずしも英語学力が低い学生ばかりではない状況を考えて、英語力ではない別の視点の補完が必要とされているとすることができるのである。その点において、英語再履修クラスは英語リメディアル教育と一線を画すことができるといえるかもしれない。しかしながら、英語リメディアル教育という言葉で表すことができる教育に別の視点を加えると、また違った視点に言及することができる。それは、塩澤(2004)における‘Autonomous Learner’という視点であり、また清田(2010)における自尊感情と英語学習との関係性である。すなわち、自律学習者としての英語学習者を育てるという視点、そして長年の英語教育によって傷つけられてきた自尊感情の修復から英語学習への動機付けを行うという視点である。このような視点から双方で言えることは、学習者自身が学習意欲をもって英語学習に取り組むことの支援が必要だということであり、自尊感情という視点も学生の心理を分析し、より有効な方法論を模索する必要があるということである。

## 2. 英語リメディアル教育における諸問題

英語リメディアル教育クラスを受け持った教員はこれまで多くの問題を抱えてきている。学生の学力低下が叫ばれ始めてすでに20年以上が経過しているが、今現在の状況は20年前に考えられた状況をはるかに超えているに違いない。教育とは、教員一人だけでできることではない。学生がいて、教員がいて、大学があり、クラスがあり、そしてそれらを取り巻く社会がある。そしてリメディアル教育クラスはまさにその一つ一つに問題が関わっているのである。ここでは、今一度英語リメディアル教育に関する問題を明らかにし、我々教員が今直面している現状を把握してみたい。

## 2. 1 英語リメディアル教育クラス

まず、英語リメディアル教育のクラスであるが、そのクラスの位置づけ、および開講の仕方である。そもそも大学入門レベルの英語レベルに達していない学生の英語の補習的位置づけのクラスであり、そのクラスの履修を学生にどのように動機付けるのかである。必修単位のクラスとして開講するのか、それとも完全に学生による自主的参加のクラスなのか、または必修単位のクラスの単位要件として扱うのか悩ましい問題である。

必修単位のクラスの中に英語リメディアル教育的なクラスが存在するならば、それはまさに大学英語教育とは何かという問いかけをすることになる。齊藤(2004:30)は「文学を読まずに何が英語教育か」と述べているが、たとえ文学でないにしても、ある一定のレベルの英語を学習するのであれば、大学における英語教育というもののあるように疑問を投げかけることになる。また、学生自主参加の形での英語リメディアル教育クラスでは特に、入試に英語を課されずに入学してきた学生の場合、英語が受験科目にないことを理由に選んだケースも多く存在し、入学当初より英語に苦手意識を持っている故に自主的な参加が望めず、真に学習してほしい学生が参加しないことが多いのである。

次に、英語リメディアルクラスの開講におけるクラス編成の問題もある。張・平澤(2010:60)によると、「大学の正規科目受講時の学力のばらつきを減らすために、リメディアル教育を実施する大学は少なくないが、リメディアル教育においても学力の大きなばらつきが問題となる」としている。多くの大学において、プレースメントテストを実施し、その点数によって学生のグループ分けを行っているのであるが、実際のところグループ化する場合のプレースメントテストの境界点数は直感的に取り扱われることが多いのである。張は「学生のグループ化の基準や方法について、十分に解明されていないのが現状である。如何に学生の学力変化を推測し、最も適切な教材を与えられるかがリメディアル教育分野の重要な課題となっている」として、Web学習前の学力テストから学生の学力変化を推測し、そこから学生にあった教材を選別する方法を紹介した。事前テストと事後テストとの相関関係を調べ、アンケート結果をもとに回帰分析することにより事前テストの妥当性について証明しているが、今後の課題として勉強意欲や学習環境などの要素を考慮する必要があると言及しているように、学力の変化予測は事前の学力テストからだけでは不十分ともいえる。今後の研究成果が待たれるところである。

## 2. 2 英語リメディアル教育の限界

酒井(2011:11)では「大学でリメディアル教育をうまく施しても、卒業後に仕事に使えるわけでもない英検3級レベルの英語力をつけるのがせいぜいである。」と言及している。また、清田(2010:37)でも「習熟度別クラスにおいて、自分のレベルに合った基礎的な教材を使用した場合、学生は一応「取り組む」ことができる。そのため表面上はおとなしく学習し、授業は成立しているように見える。しかし、これで英語の学士力獲得への道筋をつけることができるのだろうか」と大学におけるこれまでのリメディアル教育のありかたに疑問を呈している。まさに、これが現在の英語リメディアル教育の一番の問題であり、そしてその限界点なのである。清田によれば、リメディアル教育対象の学生は、自分が学力不足であることを自覚している場合が多く、そのような学生は自分たちのレベルにあった教材を与えられたとしても、その教材は中学や高校の内容であることが想像できるから、学習意欲や態度を向上させることが難しく、教師の指示通りに教材を消化すること以上の学習には発展しないのである。教材レベルでそのような傾向があるのならば、教員に関してもそれは同様で

ある。多くの大学で実施されているリメディアル教育の方法として、予備校の講師や地域の高校の教員が大学に出向いて補習をするリメディアル教育が実施されているが、同様の結果にしかならないことは明白である。自らの意志で自律的に学習としない限り、授業内の学習を強制されるだけではそこだけの学習に中身が限られどうしてもその達成度は低いものなる。そうした結果、教員側が考える学力への伸張は極めて困難なのである。

### 2. 3 英語リメディアル教育の方向性

では、今後英語リメディアル教育はどのような方向に向かっていくべきなのか。Kiyota(2009)は英語の習熟度と学習動機が低い学生に調査を行い、その結果として最初は英語に対して意欲的であった学生も一度苦手意識をもってしまうと大学まで続く傾向があるとし、加えて努力帰属であった意識が能力帰属に変わってしまうと報告した。リメディアル教育は英語教育の欠陥の具現化と言及する酒井(2011)はそのような苦手意識を作り出した英語教育の犠牲者ともいえる学生のリメディアル教育には学習者自律が重要であると述べている。清田(2010)も同様にリメディアル教育対象学生の英語に対する学習動機を高めることに言及しているが、それに加えて自尊心という概念をキーワードに挙げている。すなわち、英語リメディアル教育の学生は中学や高校における英語学習の不成功体験を引きずる傾向があり、大学入試に至るまで学習動機が特に低い学生は英語学習に否定的な感情を持っているのである。したがって、このような学習意識の改善こそが英語リメディアル教育に必要な要素であるとしているのである。従来の学生に合わせた基礎的なレベルの文法などの学習だけでなく、学生の中にある自尊心を取り戻すような授業を行うことこそが英語リメディアル教育の学生に必要な教育内容であるという視点は極めて画期的であろう。確かに、清田の研究では、英語学習に否定的なリメディアル学生へのアンケート調査から否定的な要素を分析するための因子分析を行い、その因子を割出すことで、リメディアル学生にとって必要な癒しとでもいべき要素を伴った教育の必要性について言及している点には説得力があるが、果たしてその因子には個人差がないかという点には疑問の余地が残る。そして、その因子を解決する方法論としてどのような方法があるのかについては今後の研究を待たれるところである。

### 2. 4 絶対的リメディアル教育と相対的リメディアル教育

リメディアル教育、または英語リメディアル教育という言葉が我々が使用する際、リメディアルという言葉に対する主観がそこには常に存在する。つまり、所属している大学によって学生の学力レベルは当然のことながら異なっており、大学の英語の授業についていく際に必要な最低の学力レベルもまた異なるのである。したがって、Aという大学ではリメディアル教育が必要な学生であっても、Bという大学では上位の学力であった場合リメディアル教育が必要な学生とはならない。つまり、リメディアル教育とは時として所属する大学によってその言葉が指す学力の範囲が異なってくるのである。なぜこのようなことが起こりうるのかというと、当然大学ごとに学力レベルの差があることはもちろんであるが、それに加え、大学生に必要な英語レベルとしての基準が示されていないからである。学士力として証明されうる英語力の基準の上なのか、下なのかを示すすべがないからである。したがって、多くのリメディアル教育に関する研究報告や授業実践報告によくあることではあるが、発表者の大学においてしか効果のない方法論であるがゆえに他大学の教員には全くその成果が還元されないということが多々あるのはそのような理由からでもある。そのような状況においては、各大学によって異なる英語リメディアル教育を必要とするレベルの境界線を相対的リ

メディア教育レベルと呼ぶほうが意味としてより正確であると言える。また、それとは逆に全国のどの大学においても確実に英語リメディア教育の対象者として認識されるレベルを絶対的リメディア教育と呼ぶことができれば、大学教員はプレースメントテストによるグループ分けにしても効果的に実施することができ、また学生も大学における英語学習に一つの目標ができるであろう。さらに、どの大学からでも一定のレベルの英語力を身につける機会が得られるのである。しかしながら、一番の問題としてその英語レベルを測る物差しの問題である。現在、極めてその役を果たしうるのはTOEICであるが、その有効性には疑問の余地を残すところであり、今後議論が必要である。

### 3. 英語リメディア教育の意義とは何か

現在、英語リメディア教育は全国の多くの大学において否応なしに実施されている。多くの場合、大学側が学生のことを慮ってでもなく、学生側が大学側に要求したからでもない。それなくしては、そもそも大学の英語教育が成立しなくなってきたからである。しかしながら、目の前に迫っている事態の処理に追われて、そもそも英語リメディア教育というのは実際に大学側がすべき教育なのか、もし実施する必要があるとして実際に補完すべき力とは何なのかという議論が置いて行かれているように思われる。さらに言えば、大学とはそもそも義務として学生が行く場所ではなく、ゆえに学生選抜の大学入試があるわけである。そもそも、大学入門レベルに明らかに達していない学生が入学するという事態は大学入試事態の意味に疑問を投げかけるものである。もちろん、そのように問題の原因を大学入試にすり替えるとその原因は次々とたらい回しにされ、結論がでることはない。しかしながら、今後英語リメディア教育という教育形態が大学で行われていくのに際し、それを実施する義務をもった教員側にはその意義について、なぜ、何のために、何を目標としてするのかについてのそれぞれの答えをもっていなければ、それこそ教員側の動機も続くものではない。

ここでは、英語リメディア教育をなぜ行うのか、そしてそこから学生や教員は何を得られるのかについて3つの事例を通してその意義を検討してみたい。

#### 3. 1 中・大連携授業を通じた授業実践から考える

筆者は2012年8月16日～18日にかけて、鳥根県邑南町にある中学校3校を対象に中学・大学連携授業を行った。対象は各中学の2年生及び3年生であった。3年生は主に、これから高校入試を迎えるにあたって英語長文を読むための講座であったが、2年生は特に英語が苦手な学生のための音読講座を実施した。この講座は基本的に強制ではなく、あくまで自主的な参加である。

Benesse教育開発センターが2009年に行った中学2年生を対象にした調査では、授業の理解度についての項目に関して「30%くらいわかっている」と「ほとんどわかっていない」という選択肢を選んだ学生が合わせて3割近くも存在していた。つまり、中学2年生段階で英語学習者の全体の3割がすでに学習についていけない状況なのである。この段階ですでに補完教育として彼らに何らかの手立てをしておかなければ、Kiyota(2009)にあるように、大学まで英語の苦手意識は続いてしまう可能性が非常に高い。そういう意味では、この中学・大学連携授業は早期英語リメディア教育と言えなくもない。今回の授業実践では、夏休み開始直前の学習進度を考慮に入れて不定詞の理解を考慮に入れた教材を作成し、彼らに目標を持たせ、目標達成のための音読を中心にした授業を展開した。音読が英語が苦手な学生に有効な活動であるか否かの議論は置いておくとしても、彼らに何らかの



動機を与え、そして達成した英語をがんばってみようと思わせるために、できるだけ彼らが声を出し、英文のインプット及びアウトプットを体験するための授業設計をしたのである。Griffith(2008)が言及するように、「やる気、動機づけ」とは学習者に何らかの選択をさせ、学習行動に従事させ、それをやり遂げさせるものでなくてはならないのであるが、まさに英語学習に対する成功体験を持たせる必要があったのである。以下に、実際にこの授業で使用した教材と、その授業に対する生徒のコメントを載せる。

○教材 1

藍南町セミナーセンター Special Program for the Second grade students  
 ~ Oral reading program ~  
 I go to the library to read twice a week.  
 私は週に2回読むために図書館へ行きます。

I like mysteries because they're fun.  
 私はミステリー本が好きです。なぜなら面白いからです。  
 The fun part is to solve them yourself.  
 面白いところは、自分自身で謎を解いていくことです。  
 Reading mysteries is a good way to exercise your brain.  
 ミステリー本を読むことは、あなたの脳を鍛錬するのに良いことです。

I go to the library to read twice a week.  
 私は週に2回読むために図書館へ行きます。

**Draw**  
 mystery 「ミステリー(謎、など)」 solve 「(問題を)解く」  
 myself 「自分自身で」 answer 「(正)答」  
 because 「(理由)だから」

- Question1.  
 What is fun about mysteries?
- Question2.  
 What is a good point about reading mysteries?
- Question3.  
 Why do I go to the library twice a week?

○教材 3

--- 教科書プリント ---  
 1. 読んでみて、口を動かして練習する。  
 2. 英文中の□で書かれている部分(黒板の部分を日本語で訳するようにする)。  
 3. 英文全体を日本語で読むようにする。  
 4. 1,2の英文を3と5の間に読み、その日本語に訳するようにする。  
 5. 1,2の英文を聞いて、日本語で訳するようにする。(Good for today)

- |   |  |
|---|--|
| 1. I like <b>to draw pictures</b> .                 | 1. 私は <b>絵を描くこと</b> が好きです。               |
| 2. They like <b>to play baseball</b> .              | 2. 彼らは <b>野球をすること</b> が好きです。             |
| 3. I want <b>to be famous</b> .                     | 3. 私は <b>有名になること</b> を望みます。              |
| 4. He wants <b>to be a doctor</b> .                 | 4. 彼は <b>医者になること</b> を望みます。              |
| 5. We need <b>some pencils to write with</b> .      | 5. 私たちは <b>書くための何本かの鉛筆</b> が必要です。        |
| 6. I need <b>a lot of time to sleep</b> .           | 6. 私は <b>眠るための時間</b> がたくさん必要です。          |
| 7. I have <b>something important to tell you</b> .  | 7. 私は <b>あなたに話さなければならない何か</b> があります。     |
| 8. She has <b>some questions to ask you</b> .       | 8. 彼女は <b>あなたに聞かなくてはならない何か</b> の質問があります。 |
| 9. This problem is difficult <b>to solve</b> .      | 9. この問題は <b>解くのが</b> 難しい。                |
| 10. My brother works hard <b>to save money</b> .    | 10. 私の兄は <b>お金をためるために</b> 一生懸命に働きます。     |
| 11. He came to Japan <b>to work</b> .               | 11. 彼は <b>働くために</b> 日本に来ました。             |
| 12. They went to the park <b>to play baseball</b> . | 12. 彼らは <b>野球をするために</b> 公園に行きました。        |

○教材 2

☆「To+動詞の原形」を Master しよう!! ☆

<名詞的役割>

**draw** I like **to draw pictures**.  
 私は絵を**描くこと**が好きです。

**be** I want **to be famous**.  
 私は**有名になること**を望みます。(有名になりたい)

<形容詞的役割>

**write** We need some pencils **to write with**.  
 私たちは**書くための何本かの鉛筆**が必要です。

**tell** I have something important **to tell you**.  
 わたしはあなたに**話すべき何か**が重要なことがあります。

<副詞的役割>

**solve** This problem is difficult **to solve**.  
 この問題は**解くのに**難しい。

**save** My brother works hard **to save money**.  
 私の兄は**お金をためるために**一生懸命に働きます。

## ○生徒のコメント

- ・覚えやすい方法でリズムテンポを使った覚え方などがあったので、また来年来て、ほかの覚えやすい方法を覚えたいです。
- ・楽しく授業をしているうちに、こんなに英語力が身に付いているのに自分でも驚きました。是非来年も行きたいと思います。
- ・聞くだけじゃなくて、書いたり言ったりできてよかったです。
- ・重要な点など教えてもらえてよかったです。
- ・「To + 動詞の原形」が苦手でしたが、自信ができました。何度も英文を口に出すと覚えられるんだなあと思いました。
- ・今までよくわからなかったところが、少しは分かるようになりました。リズムに合わせて英文を読むのが楽しかったし、覚えやすかったです。英語がんばろうと思いました。
- ・私は、ちょうどTo不定詞がとても苦手だったので、教えてもらってすごくうれしかったです。リズムなどを使っていて分かりやすかったです。
- ・このようにすると考えやすいとか、家でもできそうなことがあって勉強になりました。
- ・リズムを使って英文を覚えるのはよかったです。
- ・大学の先生はすごくわかりやすい授業だった。楽しくできた。
- ・大学の先生だったので、難しい勉強になるかと思ったら、分かりやすく説明してもらったので、分かりやすかったです。
- ・学校の授業より分かりやすくてよかったです。リズムで覚えたりすると頭に残るので、いいなあと思いました。来年もまたきたいです。
- ・学校の授業とちがった方法でやって、いつもより真剣にできて、時間も早く過ぎて、でもとてもわかりやすかったし、楽しかったです。
- ・ふだんの授業とはちがって、楽しく勉強することができた。
- ・授業とか家での勉強では、ただ書くだけだったけど、実際口を動かして書いたりすると、頭にけっこう入ってくるので、家でもしようかなと思いました。リズムで発音するのもおもしろいし、分かりやすかったです。
- ・音読とかをやって、頭に入った感じがするので、自分も音読をして頭に入る勉強をしたいです。

この中学2年生対象の授業では、主に音読を通して英語学習への達成感を感じてもらい、そのうえで文法項目を修得することを前提にしている。音読としては、コーラスリーディングから、バズリーディング、ペアリーディング、リズムリーディングやリード&ルックアップなどを実施した上で音読筆写を実施した。最終的には、英語→日本語、日本語→英語を目標としてサイトトランスレーションやリスニングトランスレーション的な活動を取り入れたが、難易度が高いにも関わらず生徒たちは非常に熱心に取り組んでいたようである。

彼らの様子から、普段の英語学習ではどうもあまり書く分量も音読する回数も非常に少ない傾向があり、生徒の中には非常に新鮮に感じたものも少なからずいたようである。また、「英語が楽しくなった」とか「これから頑張ろう」や「時間がはやく過ぎた」などといった意見からは英語学習に対する学習動機の再度の獲得が見られる。来年もまた来てほしい等とのメッセージを彼らから受け

ることはこちらとしても励みになるとともに、いかに英語を身につける機会や自分自身の達成感を感じる機会を求める生徒たちが多くいるかということを確認するのである。白倉(2011)における「やる気」デフレ・スパイラスにはまり込むまでにどれだけ英語リメディアル教育として生徒たちに必要な教育をすることができるのか、切実な問題である。しかしながら、だからこそ彼らにとっての自尊感情へのマイナス要因にならないようにすることも必要な教育であると言える。

### 3. 2 鳥取大学・島根大学の一般教育英語クラスの意識調査から考える

2011年度の後期に、鳥取大学・島根大学の両方において一般教育英語クラスにおいて学生が受講したクラスの授業評価とともに、筆者が属している大学の一般教育英語のクラスについての意識調査を実施した。

両大学ともに70～80名ほどの学生を対象にした無記名アンケートであり、選択式と自由記述の2通りから学生の意識を調査した。調査項目は10項目あるので、ここでは、学生が現在受講している大学の一般教育英語の授業に満足しているかについての項目、どんな授業を受講したいかについての項目、そして授業の感想その他の自由記述の3項目についての結果を紹介する。この調査は表記のように、一般英語教育クラスで調査したものであるため、英語リメディアル教育クラスと直接の関係性はないが、英語リメディアル教育を必要とするか否かを学生の立場からみた意見として参考になると考える。また、鳥取・島根の両大学ともに学力的に非常に近似的な地方国立大学であることもあり、調査を取る学生の学部をそろえることで、学生の質のずれもきわめて少なくそのデータ比較も学力的差異の視点をあまり考慮する必要がないと推測する。

ここでは、まず最初に、鳥取大学と島根大学に関して、一般教育英語クラスのカリキュラムについて紹介し、次にそのアンケート結果について載せることとする。

表1. 鳥取大学が実施する教養科目における英語教育（必修科目）

学年進行	授業科目名等	単位数	備考
1年前期	コミュニケーション英語A	1単位	外国人講師による少人数英会話
	コミュニケーション英語B	1単位	CALL学習によるTOEIC対策
1年後期	実践英語A（プロダクション・クラス）	1単位	
	実践英語B（インテイク・クラス）	1単位	
2年前期	総合英語I	1単位	
2年後期	総合英語II	1単位	

表2. 島根大学外国語教育センターが実施する教養科目における英語教育（必修科目）

学年進行	授業科目名等	単位数	備考
1年前期	英語I A（1単位）	1単位	
1年後期	英語I B（1単位）	2単位	習熟度別コース制（基礎コース、標準コース、上級コース）による科目
	英語II A（1単位）		
2年前期	英語II B（1単位）	1単位	習熟度別コース制（基礎コース、標準コース、上級コース）による科目

島根大学の1年生後期の英語II Aおよび2年生後期の英語II Bは習熟度別のコース制であり、学生の

選択式で英語長文の速読，精読や文法クラス，会話クラスと選べるコースが存在している。また，英語ⅡBでは，扱う英語をできるだけ各学部の専門の英語を扱うテキスト等を使用して専門英語の入門コースとしての位置づけをしている。

○ 2011年度 鳥取大学における「総合英語」クラスにおける調査結果(工学部、農学部学生74名)

問6. 現在の大学の一般教育の英語授業に満足していますか？					
A. とても満足している		B. どちらかといえば満足している		C. どちらでもない	
D. やや不満足である		E. とても不満足である			
A.	3	B.	23	C.	33
D.	12	E.	3		
問7. 問6でAまたはBを選んだ方にお聞きします。その理由はなぜですか？（複数回答可）					
A. 授業が楽しいから		B. 自分に必要な授業をされているから		C. 英語力がつくから	
D. 授業が楽だから		E. その他			
A.	6	B.	16	C.	4
D.	3	E.	1		
問8. 問6でDまたはEを選んだ方にお聞きします。その理由はなぜですか？（複数回答可）					
A. 授業が楽しくないから		B. 自分に意味のない授業だと思うから		C. 英語力がつからないから	
D. 授業が厳しいから		E. その他			
A.	2	B.	1	C.	12
D.	0	E.	2		
問9. もし一般教育の英語の授業の内容を選べるとするならば，受講したい授業内容はどのようなものを希望しますか？（複数回答可）					
A. 基礎文法		B. TOEICスコアアップ講座		C. 英会話（コミュニケーション）	
D. リスニング		E. 自分の（学科）専門の英語		F. その他	
A.	11	B.	42	C.	52
D.	6	E.	13	F.	0
問10. 授業の感想，その他を何でも書いてください。（担当教員へのメッセージ等）					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・丁寧に教えてくださって，とてもよかったです。</li> <li>・授業自体は好きだったが，授業数が少なくて残念だった。</li> <li>・先生の授業が大学の英語の授業で一番勉強になった。</li> <li>・しっかり精読できてよかった。</li> <li>・週に1回しか授業がないのに，進むのが遅かった。</li> <li>・もっと前から出会いたかったです。</li> <li>・とてもわかりやすい授業でした。</li> <li>・もう少し授業のスピードを上げて大丈夫だと思います。</li> <li>・半年間ありがとうございました。</li> <li>・授業は分かりやすかったです。</li> <li>・“チャック”という考えが良かった。</li> </ul>					

鳥取大学の一般教育の英語の授業への満足度はAとBを選んでいる学生は26名，Cの「どちらでもない」が33名で，「不満足である」と答えた学生はD，E合わせて15名であった。満足している学生は全体の3割強であり，数字的には多いとは言えない。満足している学生の理由としては，自分の必要な授業をされているからが16名で一番多く，大学英语に満足している学生の多くは必要な授業と実感しているようである。また，満足していない学生のうち12名は英語力がつかないことをその理由としてあげており，授業に満足できない学生と授業に関する実感との関連性を明確に表している。大学側に望んでいる授業内容に関してであるが，Cの「英会話」が一番多く，次に「TOEICスコアアップ講座」を選ぶ学生が多かった。Aの「基礎文法」を選ぶ学生も11名おり，基礎的な英語の授業の実施を期待している学生の存在が認められる。



## ○ 2011年度 島根大学における「英語ⅡA・ⅡB」クラスにおける調査結果((理工学部、生物資源科学部80名)

問6. 現在の大学の一般教育の英語授業に満足していますか？					
A. とても満足している		B. どちらかといえば満足している		C. どちらでもない	
D. やや不満足である		E. とても不満足である			
A.	8	B.	28	C.	37
D.	5	E.	2		
問7. 問6でAまたはBを選んだ方にお聞きします。その理由はなぜですか？(複数回答可)					
A. 授業が楽しいから		B. 自分に必要な授業をされているから		C. 英語力がつくから	
D. 授業が楽だから		E. その他			
A.	7	B.	18	C.	21
D.	1	E.	0		
問8. 問6でDまたはEを選んだ方にお聞きします。その理由はなぜですか？(複数回答可)					
A. 授業が楽しくないから		B. 自分に意味のない授業だと思うから		C. 英語力がつかないから	
D. 授業が厳しいから		E. その他			
A.	2	B.	2	C.	3
D.	1	E.	2		
問9. もし一般教育の英語の授業の内容を選べるとするならば、受講したい授業内容はどのようなものを希望しますか？(複数回答可)					
A. 基礎文法		B. TOEICスコアアップ講座		C. 英会話(コミュニケーション)	
D. リスニング		E. 自分の(学科)専門の英語		F. その他	
A.	22	B.	45	C.	35
D.	7	E.	26	F.	1
問10. 授業の感想、その他を何でも書いてください。(担当教員へのメッセージ等)					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・文法の学習は英語の基礎なので、今学期の勉強を通してじっくり英文法の学習ができたのは大変役にたったと思います。ありがとうございました。</li> <li>・緊張感がほどよかったです。</li> <li>・授業内容もわかりやすく楽しい授業でした。</li> <li>・英語の文法について、中高の段階ではあまり理解できていなかったけれど、テキスト以外の例文を黒板に書いてくれて説明してくれてとてもありがたかったです。長文の時に先生が出す質問は面白かったです。</li> <li>・英文の追いかけてこの音読が楽しかったです。友達と練習するときによく使います。</li> <li>・基礎文法力がついたと思う。</li> <li>・丁寧な解説でとてもわかりやすかったです。</li> <li>・この授業のおかげで英語の感覚がわかったような気がします。まだましになりました。</li> <li>・簡潔に説明していて頭に入ってきやすかった。</li> <li>・1年間教育していただきありがとうございました。TOEICの点数が伸びていてうれしかったです。来年もがんばってください。</li> <li>・自分の苦手な部分が克服できました。</li> </ul>					

島根大学の一般教育の英語の授業への満足度はAとBを選んでいる学生は36名、Cの「どちらでもない」が37名で、「不満足である」と答えた学生はD、E合わせて7名であった。半数近くの学生が満足であると選んでいるものの、同時に半数の学生がCの「どちらでもない」を選んでおり、満足している学生とそうでもない学生との割合が半々となっている。授業に満足している学生のうち、21名は「英語力がつくから」、18名が「自分に必要な授業をされているから」をその理由として選んでおり、比較的学生の要望に応じて授業を提供できていると思われる。また、学生が希望している授業内容についてであるが、BのTOEICスコアアップ講座が一番多く、次に英会話、専門英語という順番で学生が希望する数があり、今現在行っている大学の授業内容と比較的一致しているが、Aの基礎文法もまた22名の学生が選んでおり、基礎的な英文法のクラスで自分の英語力の補完をしたいと考えている学生がかなり多くいることがわかる。

鳥取大学の学生のコメントで非常に興味深い内容として、「授業自体は好きだったが、授業数が少なく残念だった」というコメントや「週に1回しか授業がないのに、進むのが遅かった。」というコメントがあった。このコメントを書いた学生たちから明らかに「もっと授業を受けたかった」という気持ちや「もっともっと、授業をすすめて英語を勉強したかった」という気持ちが伝わってくる。また、学生の中に週1回の英語授業は少ないと感じている学生が少なからず存在し、そのあたりにも大学における一般教育英語の問題点があるのではないかと感じられる。

鳥根大学のコメントでは、授業自体は文法演習および長文読解の総合英語のクラスであるが、文法の復習ができたことに満足したコメントが多数存在している。「文法の学習は英語の基礎なので、今学期の勉強を通してじっくり英文法の学習ができたのは大変役にたったと思います。」というコメントや「1年間教育していただきありがとうございます。TOEICの点数が伸びていてうれしかったです。来年もがんばってください。」というコメントからは自分にとって必要な授業が受けられてことによる喜びがそのメッセージに表れているといえる。

ここで紹介した鳥取大学と鳥根大学の一般教育英語クラスにて行ったアンケートからまず言えるのは、英語学習に対して学生はそれぞれの期待や目標をもって授業を受けていること、そして英語の学習の機会をもっと持ちたいと願っていることである。鳥取大学の講義の数は15回であるが、その数が少ないとコメントしている学生が実際に存在しているように、学生はまだまだ英語の授業を受講して英語を理解したいと願っている。特に英語を苦手としている学生にとって、授業を通して英語がわかるという実感をもてる時間を増やすことはきわめて強い欲求であろうと考えられる。そして、正規の英語クラスがそれをかなえることができないのであれば、それは英語リメディアル教育クラスの役割であるといえよう。中学または高校時分からずっと英語がわからなくて苦手としてきた学生にとって、久しぶりにわかるという実感を持つことができるのは、将来に対して大きな希望と自信につながるといえるかもしれない。英語リメディアル教育クラスがもたらすことができるのは、そのような学生の学びに対する喜びの補充や、学生の今後への目標設定といった今後へとつながるより自立的な側面であるといえるのである。

### 3. 3 鳥根大学における英語リメディアル教育クラスにおける意識調査から考える

鳥根大学は主に新生を対象として、前期に「大学英語入門」という名前の英語リメディアル教育クラスを開講している。基本的に、正規のクラスとは異なり単位修得要件のあるクラスではないが、入学時ということもあり学生も様々な不安を抱えており、英語に苦手意識を持った学生が多数履修登録をする。毎年、100名近くの学生が自主的に授業を受けているが、授業の回数を重ねていくうちにその数は減少し、学期末には最終的に40名近くの人数に落ち着いているようである。大学側としては、入学当初に実施するTOEICのIP試験にて300点に満たなかった学生の履修を強く訴えているが、なかなかその思いがうまく伝わっていないのが現状である。実際のところ、TOEIC-IP試験300点未満の学生の参加はあまり多くはない。筆者も2011年度にその授業を担当したが、授業に積極的に参加する学生の学力はそれほど高くはないが英語に対する学習意欲がある学生がほとんどで、単位修得はなくても予習にきちんと取り組んで参加したり、授業中での取り組みにおいても非常に熱心な学生が多いと感じた。実際のところ、この英語リメディアル教育クラスに参加する学生のTOEIC-IP試験のレベルは大体300点～400点レベルの学生がほとんどであり、中には450点を超えていても受講を希望する学生も存在している。

しかしながら、自主的なクラスながら学生の意識の中に単位修得がなくても自分の英語力の補完

のための努力をしようという意欲があるのは好ましいことである。そのような学生の英語学習への意欲が他の学生に浸透していくような仕掛けがこれからの大学英語リメディアル教育には必要であるといえる。ここでは、その「大学英語入門」クラスについてのアンケート結果を紹介する。2011年度と2012年度の2回分の結果である。2012年度も最後まで講義に参加した学生は例年並みに存在したが、提出されたアンケート数が20名ほどであったことで2回分のアンケートの母数に数のばらつきが存在している。

○2011年度 大学英語入門 アンケート結果（問5、問6）

問5 総合的に、「大学英語入門」に満足していますか？

A. とても満足している	B. どちらかと言え ば満足している	C. やや不満足である	D. とても不満足である	E. どちらとも言えない
7	25	5	1	0

問6 後期にも「大学英語入門」のようなサポートプログラムを実施する予定ですが、受講したい授業内容はどのようなものを希望しますか？（複数回答可）

A. 英文法のもう 少し詳しい説明 と練習問題	B. 後期の授業 (英語IB・英語II A)の予習・復習・ 質問会	C. TOEICスコ アアップ講座	D. 易しい英文読解	E. その他
12	27	20	10	2

○2012年度 大学英語入門 アンケート結果（問5、問6）

問5 総合的に、「大学英語入門」に満足していますか？

A. とても満足している	B. どちらかと言え ば満足している	C. やや不満足である	D. とても不満足である	E. どちらとも言えない
10	9	0	0	0

問6 後期にも「大学英語入門」のようなサポートプログラムを実施する予定ですが、受講したい授業内容はどのようなものを希望しますか？（複数回答可）

A. 英文法のもう 少し詳しい説明 と練習問題	B. 後期の授業 (英語IB・英語II A)の予習・復習・ 質問会	C. TOEICスコ アアップ講座	D. 易しい英文読解	E. その他
4	11	10	6	0

2011年度、2012年度の両方ともに、多くの学生が総合的に「大学英語入門」に満足しているという実感をもっているようである。単位修得がないので、途中で参加をやめた学生からアンケートをとっていないこともあり、学習意欲が高い学生からとった結果だとも言えるが、少なくとも参加し

た学生のほとんどが英語リメディアル教育のクラスに満足したという結果が出ている。つまり、学生自らがそのクラスが必要だったと答えたわけである。また、後期以降にも参加したい英語リメディアル教育クラスとして後期授業の予習・復習・質問会を多数の学生があげていることから、学習意欲があっても自分たちの英語力と大学側が求めている英語力との差を実感し、危機感を感じている学生が多いことが分かる。また、すでに前期授業で実施している正規の英語TOEICクラスを受講した後にもかかわらず、なおTOEICクラスを英語リメディアル教育クラスで受講したいと答えている学生が思いのほか多かったことから、こちらが考えている以上に学生の英語に対する自主的学習意欲というものには存在しており、その意欲を喚起することのできるプログラムであれば、より多くの自主的な学生の参加をみこめると考えられる。そして、そのように、学生の自主、自立的な学習意欲を喚起し、学生の背中を押してやれるような英語リメディアル教育クラスを展開することができるならば、今後多くの学生に英語学習に対する展望を与えられるのではないかと推測する。

### 3. 4 英語リメディアル教育は必要なのか

本節では、英語リメディアル教育について、中学・大学連携授業、一般教育英語クラスアンケート、そして英語リメディアル教育クラスのアンケートの3点から見てきた。英語が苦手な大学生の多くは、中学生時分からすでに苦手であった傾向があるのであるが、将来的な苦手意識、Kiyota(2009)が言及する努力意識ではない能力意識による英語の苦手意識を形成してきているのである。したがって、英語リメディアル教育の役目として単なる学力補完だけでなく、学生の学習意欲や能力意識を努力意識に変えるような視点をもっているならば、理想的には英語リメディアル教育は大学からではなく、そこにいたるまでの段階においても学生に施す機会をもつべきである。たとえ大学からの英語リメディアル教育であっても、まずは学生の意欲、意識を変える視点をもった教育を実施することで学生の意識改革を行うことから始める必要があるであろう。その学習には先があると思わせる仕掛けが必要である。実際、島根大学の英語リメディアル教育クラスである「大学英語入門」に参加している学生の英語に対する学習意欲は非常に高い。大学入学時点における学力が平均より低くても、学生の学習意欲や英語学習に対して自分なりの目標を持った動機付けがあるのならば、教員側としてもそのような学生の要望にこたえる形での教育クラスを提供することは可能であろう。正規クラスとしてできなくても、英語リメディアル教育クラスとして学生のニーズに答えてやればよい。実際、英語リメディアル教育クラスに参加している学生だけでなく、鳥取大学・島根大学の双方の一般教育英語クラスで多くの学生がまだまだ英語の授業を通して英語を学びたいと答えている。中学・大学連携の際のように成功体験を多く経験させ、継続的な英語に対する学習意欲を喚起し、学生に対して目標をあたえるような形で、そして学生のニーズに答えるように英語リメディアル教育クラスを展開していくことができれば、英語リメディアル教育とは明らかに大学教育において必要な教育であるといえると考えられる。

### 4. 終わりに

本論文では、現在日本の多くの大学においてますます困難な問題となっている英語リメディアル教育についての現状と意義について今一度再考するため、英語リメディアルとは何か、そしてその問題点とは何なのかについて言及し、中学・大学連携授業、一般教育英語クラス、そして大学英語リメディアル教育クラスなどにおける意識調査からみられる学生の意識をもとに論じてきた。現実



的な問題として、目の前におきている学生のきわめて深刻な学力低下に対処するための対処療法的に実施されている英語リメディアル教育なのであるが、その問題点はこの論文の中でも明らかにされたように、その教育クラスのあり方や種類、その教育がなしうる限界点、さらには今後向かうべき方向性、そして絶対的リメディアル教育と相対的リメディアル教育といった使用する場面によって変わる英語リメディアル教育という言葉が意味しうる定義と、その問題の種類も様々である。今後、どのような形で英語リメディアル教育を実施していくにせよ、これらの問題は必ず目の当たりにするものであろう。しかしながら、問題点があるということは、同時に改善の余地があるということでもある。英語リメディアル教育にてなしうることは何なのかを今一度議論し、大学英語とは何かということに関しても合わせて再考していくことで今後の方向性も見えてくるのではないかと推測する。

これまで、大学リメディアル英語教育では、あくまで英語の学力が大学生レベルにまだ満たない学生に基礎的な英文法などの授業を補習として実施するということが多かった。基礎学力が足りていない学生に基礎的なクラスを実施する。やることは決して間違っているとは思えない。しかしながら、その場が大学であるということを考慮に入れるならばやはりそこに参加する学生の意識という視点を持たなければならない。あくまで、学生が受講したいと思わせる仕掛けがそこに必要なのである。したがって大学という場に、中学・高校の復習と称して中学・高校の教員や予備校の講師が来ても決して解決にならないであろう。なぜならば、今後英語リメディアル教育としてもつべき視点には大学生の自尊感情や自立意識の育成といった点も必要になるからである。週に限られた数の英語の授業と補完授業としての英語リメディアル教育クラスだけでは、彼らの学習意欲を満たすことも、そして十分な学習時間を費やすこともできない。であるならば、いかに英語リメディアル教育を必要とする学生がその意欲や自立意識を育ていけるのかを視野にいれなければ、その方向性に光はさすものでない。聖書の一節にあるように、「魚」を与えるのではなく、魚の「釣り方」を教える。その視点を持つことがかなうならば英語リメディアル教育に黄金の価値が生まれるのではないだろうか。

## 5. 参考文献

- 天野郁夫 (2003) 『日本の高等教育システム』 東京大学出版会
- 白倉美里 (2011) 「学生をやる気にさせる動機づけの工夫」『英語教育』2月号 大修館書店, 25-27
- 奥羽充規 (2011) 「中学校・大学連携における英語授業実践に関する一考察－島根県邑南町サマースクールにおける授業実践を通して－」, 『島根大学外国語教育センタージャーナル』第7号, 2012年3月, 39-50
- Kiyota Yoichi (2009) “Motivation of Remedial EFL Learners (A Case Study of Japanese College EFL Learners)”, 『リメディアル教育研究』Vol.4, no.2,41-47.
- 清田洋一 (2010)「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」, 『リメディアル教育研究』Vol.5,no.1,37-43
- 清田洋一 (2011) 「否定的な学習意識を協同学習で変える」『英語教育』2月号 大修館書店, 31-33
- Griffiths, C. (ed.) (2008) *Lessons from Good Language Learners*. Cambridge University Press.
- 合田美子 (2011) 「リメディアル教育と自己調整学習」『英語教育』2月号 大修館書店, 16-18
- 斎藤兆史 (2004) 「文学を読まずして何が英語教育か」『英語教育』7月号 大修館書店, 30-32
- 酒井志延 (2011) 「リメディアルと向きあう」『英語教育』2月号 大修館書店, 10-12
- 塩澤正 (2004) 「Active Competenceのすすめ」『英語教育』7月号 大修館書店, 12-14

- 城一道子 (2011) 「英語が苦手な大学生のための英語教育奮闘記」『英語教育』2月号 大修館書店, 20-22
- 鈴木久実 (2011) 「苦手意識を持った学習者を「救う」ことの意味」『英語教育』2月号 大修館書店, 236-237
- 田村應和 (2010) 「積極的な受講指導を伴う数学補完講座の効果」『リメディアル教育研究』Vol.5,no.1,67-78
- 津田晶子 (2007) 「大学必修英語の再履修学生に関する調査と考察」, 『リメディアル教育研究』Vol.2,no.1,1-6
- 張栄・平澤宏太 (2010) 「英語リメディアル教育のクラス分け方法について」『リメディアル教育研究』Vol.5,no.1,60-66
- 穂屋下茂他 (2012) 「全国の大学対象のアンケート実施とその結果」『リメディアル教育研究』Vol.7no.1,3-16
- Benesse教育研究開発センター (2009) 『第1回中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】』
- 山岡華菜子 (2012) 「英語リメディアル教育でのオーセンティック教材の使用」, 『リメディアル教育研究』Vol.7,no.1,165-175
- 山本以和子 (1999) 「日本の大学が捉えているリメディアル教育とは？」 Benesse教育研究開発センター  
[http://benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikukaikaku/2000/kaisetu/nihon\\_remedial.html](http://benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikukaikaku/2000/kaisetu/nihon_remedial.html)

(2013年2月1日受付, 2013年2月14日受理)